

1 音楽科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 音楽科における言語活動の充実のポイントについて

- ① 「感じ取ったこと」と「聴き取った音楽的な特徴」の関連付け
 - ・ 感じ取ったことと、聴き取った音楽的な特徴への気付きの両者を言葉で表すことを通して関連を図ることが、音楽の良さや面白さなどを感じ取る力を高めていくことになる。
- ② 音楽を表す言葉の共有と活用
 - ・ 音楽を表す言葉とは、〔共通事項〕に示した音色、リズム、旋律、速度、強弱、音の重なり、問いと答えや反復などの要素、スタッカート、クレシェンドなどの音楽に関わる用語や記号がそれに当たる。表現や鑑賞の活動を通して、このような音楽を表す言葉を児童同士が共有し、活用できるようにすることが重要である。
- ③ 音楽活動と言語活動の往還
 - ・ 音楽表現に対する思いや意図を言葉で表して交流することと、実際に歌ったり演奏したりして音で試すこと。この二つの活動を適切に往還することが豊かな音楽表現につながる。鑑賞においても、感じ取った音楽の特徴を言葉で表して交流することと、実際に聴いて確かめることを往還することが聴き味わいを深めることになる。
- ④ 音楽の可視化
 - ・ 音楽は、視覚で捉えにくく瞬時に消えてしまう。そのため、適宜、音楽に合わせて体の動きで表したり、聴き取ったり感じ取ったことなどを図や絵などで表したりすることが、音楽的な特徴を捉えるための有効な手だてとなる。
- ⑤ 教師の言語活動の充実
 - ・ 児童の発言をしっかりコーディネートしていくことを大切にする。児童の思いや意図を「それはどうしてなの」「なぜなの」「そうだね」と言いながら明確にしていき、全体で共有できるようにしていくことが大切である。
- ⑥ 学び合いや高め合いにつながる言語活動の充実
 - ・ 相手の考えに呼応して自分の考えを伝えるというように、子ども同士がコミュニケーションを図りながら、自分の考えを高めていくように言語活動を充実することが重要である。ただ自分の考えを言うだけではなく、友達の言ったことに共感しながら、伝え合いを交流することで個々の感じ方が高まっていくこととなる。

(2) 学習形態の工夫について

授業のねらいに応じて、個別学習、ペア学習、グループ学習など、様々な学習形態を工夫して、適宜、それらを取り入れることが大切である。しかし学習形態の工夫は、単に複数の形態を取り入れることだけではない点に留意すること。教師が個々のグループ活動をよく観察し、ペアやグループの取組の優れた点を意味付けて紹介するなどして、全体に伝え、学習の質をより一層高めていく適切な指導を行うことが重要である。そのことによって、表現や鑑賞の質が高まり、ともに学び高め合う学習が充実することが大切である。

(3) 音楽科における思考力・判断力・表現力について

「音楽科における表現力」

- ① 「思考・判断」の過程や結果を言語活動等を通じて表す力
 - ・ 〔共通事項〕を支えとして、「このように表したい」という音楽表現に対する思いや意図を持ち、言葉などで表し、音楽の特徴が何なのかを言葉などで明確にしていく過程を大切にする。
 - ・ 鑑賞においても、〔共通事項〕の聴き取り、感じ取りを支えとして、「感じ取った音楽がどんな特徴によってもたらされているのか」「楽曲全体がどのように形づくられているのか」「自分にとってこの楽曲の素敵なところは何なのか」などを思考・判断し、それを言葉で表現する過程を大切にする。
- ② 歌唱、器楽、音楽づくりで表す力

「思考力・判断力・表現力の育成」

- ① 指導計画の作成において、必要に応じて表現と鑑賞の各活動の関連を図るようにすることが、思考・判断・表現する力を効果的に育む重要な視点である。
- ② 思考・判断を働かせることは、子どもの主体的・創造的な音楽学習を実現する。教師が楽曲を仕上げていくような授業とは違い、子どもが自ら思いや意図を持って、楽曲の良さをしっかり味わって聴くような学習を実現していかなければならない。その支えとなるのが、〔共通事項ア〕である。言語活動においても、子どもたちの中に聴き取ったり、感じ取ったりして、表したい思い、表したいものをしっかり育むことが大切である。教師は、子どもたちの中に、表したいものを持たせることが大事になる。また言語活動を取り入れるということは、子どもたち一人一人がどういうことを考えているのかをしっかりと把握する意味がある。
- ③ 児童が思いや意図を持って、思考・判断できるようにする手だてとして、感じ取ったことや工夫する点について、可視化することも大切である。

(4) 指導と評価について

- ・ 指導と評価の中に、しっかりと〔共通事項〕を位置付けることが大切である。「音楽表現の創意工夫」の観点において、単に『曲想を生かして歌う』『曲想を工夫する』のではなく、創意工夫の前段にしっかりと〔共通事項〕を位置付けること。「鑑賞の能力」の観点においても同様である。

「音楽表現の創意工夫」の観点

- 事例1 「とんび」の旋律、強弱、フレーズ、反復、問いと答えを聴き取り、それらの働きが生み出す良さや面白さなどを感じ取りながら、歌詞の表す様子、曲想にふさわしい表現を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願い、意図を持っている。
- 事例2 「八木節」の音色、リズム、旋律、強弱、音の重なり、拍の流れ、反復、音楽の縦と横の関係を聴き取り、それらの働きが生み出す良さや面白さなどを感じ取っている。

「鑑賞の能力」の観点

- 事例4 音色、速度、旋律、強弱、反復、変化を聴き取り、それらの働きが生み出す良さや面白さなどを感じ取りながら、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みの関わり合いによってつくられる楽曲の構造に気を付けて聴いている。

- ・ 音楽づくりにおける「音楽表現の技能」の観点では、音楽をつくるための条件や音楽的な約束事等、音楽をつくるための手法が実現しているかを見取る。

- 事例3 問いと答えになるように表現したり、つくったリズムをつないだりして、音を音楽にしている。

- ・ 器楽における「音楽表現の技能」の観点では、どのように演奏するか自分の思いや意図が、しっかり表現されているかを見取る。楽器を演奏するために必要な技能を身に付ける学習は、「私はこのように音楽で表現したい」「このような音色で演奏したい」という思いや意図を育てることと関わらせることによって、子どもたちが技能の必要性を実感し、学習に取り組むこととなり、意味あるものとなっていく。歌唱においても同様である。

- 事例1 音色に気を付けて、「エーデルワイス」の曲想にふさわしい表現でリコーダーを演奏している。(器楽)
フレーズごとの呼吸に気を付けて、「とんび」の歌詞の表す様子、曲想にふさわしい表現で歌っている。(歌唱)

- 事例2 拍の流れを感じながら、和太鼓の音色を生かし、正しいリズムで演奏している。

- ・ 味わって聴いている状況の評価方法においては、体の動き、表情による観察だけではなく、感じ取って聴き取ったことの発言や書き表すなどしたものを活用し、複合的な方法で見取ることが必要である。

- 事例4 学習カードの1の記述、
 発言の内容

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善
 のための参考資料【小学校音楽】事例」より